ミアソン、アトゥモロックを訪ねて

— 別添の中田さんによる訪問記・写真報告 —

ケロシンランプのもとで、夕食後の団欒をする中田さんとミアソン寮女子奨学生

アトゥモロックへの道。立往生したトラックを待つ

隣のドールパイナップル農園の用水使用禁止により、1.3km 先から水をひいた。ミアソン寮周辺住民も水道に大喜び。

ミアソンは、図中央部アトゥモロックの近くです。

渡航の可否を検討してくださいいう外務省の一般的注意に加えて、イスラムゲリラ、新人民軍（共産ゲリラ）、誘拐・山賊集団ペンタゴンなど、武装集団にかかわる現地・地方紙のニュースは、訪問を躊躇させるに十分なものでした。しかし、ミアソン寮の建設にご協力をいただいた札幌の中田さんのファックスからは、淡々と初訪問の準備を進めておられる様子が伺えました。モロコミュニティー事業の進捗状況チェックをこれ以上延期できない私としては同行者がいるのは心強いことです。お供させていただきました。

別添の訪問記（中田さんの方で部数分ご用意下さいました）に関連して、写真・地図を掲載させていただきます。 （事務局山崎）

＜奨学生の言葉・近況から＞	＜今後の教育支援を考える＞
「夏期講習の支援もしてもらえるかスポンサーに聞いてくれますか？」クリスマスパーティのために G.サントスの CMB 本部にハイスクール・カレッジ奨学生７０名が集まった時のこと。一人また一人と、合計数名から依頼を受けました。ためらいながらも真剣な目でした。	＜学力不足＞ 昨年の助産婦コース学生のように、夏季休暇中に病院実習があるというケースではありません。単位が足りない学生対象のいわゆる補習授業のようです。民族の言葉以外に、町の言葉(ビサヤ語)、国語(フィリピノ語)、英語が必要な社会です。平均 80 点の CMB 選考テストにパスした奨学生も、山の小学校卒業時のハンディをなかなか挽回できないでいます。民族性もあって、寸暇を惜しんで勉強をと求めるのは難しいようです。ノノイ神父時代のように、寮内補講が必要かもしれません。
「学校まで遠いので、雨の日は傘がなくて制服がずぶぬれになる。暑い日は汗だくになる」町の子どもと一緒に、公立学校に通い学ぶ奨学生の小さな悩みです。	＜山では当たり前だったことが・・＞聞くと歩いて 15 分程度とか。山の小学校の時は山超え谷超え 1 時間以上を通ったはずなのに。学生たちと暮らしたことがある森田さんによれば、トライスクル（乗合３輪バイク）が安いから、暑い中を歩いて通うものは少なく恥ずかしいのだろうとのこと。
「寮長ホセマラヤン、副寮長・・」自治会役員と清掃・炊事当番表が壁いっぱいに貼ってありました。朝 4 時には掃除、炊事、家畜の世話に取り掛かります。夜は宿題で 11 時就寝も珍しくありません。	＜本来の目的である学業もがんばってほしい＞思春期の学生の共同生活に規律は不可欠です。学生も修行僧のような生活を楽しんでいるように見えます。年長者が下級生の勉強の面倒を見るほほえましい光景も見られます。しかし、毎月のクリニック報告に寮生の病気が結構多いのが気がかりです。もっとよく寝て、健康で勉強に集中してほしいと願ってしまいます。
ゴムぞうりのか細い足を踏ん張って、水牛や馬を曳いて急坂を行く山の子どものたくましさに、いつも感動させられます。	＜近くの村で中等教育を＞管理の都合だけで町の寮に集めて教育することがいいのかという疑問は、ミアソン寮建設につながりました。子ども達は、週末にアトゥモロックに戻り、馬を巧みに操ってコーン出荷を手伝います。
ﾗﾑｱﾌｽ小卒業生 18 人のうち、奨学生から外れた 12 名が気がかりでした。親類や有力者の支援で何とか進学したようです。	＜門戸を広くか、能力ある子どもを伸ばすか＞ HANDS 奨学金をこれ以上増やすのは難しい状況のなか、教育支援の目指すものを再検討して、卒業期の３月末には、現地奨学金選考委員会に伝える必要があります。